

## 声楽家への軌跡-『師』との創造体験

### ～ 師としての感受性 ～

豊田 喜代美

大学卒業年に、東京文化会館大ホールで読売新聞主催『新人演奏会』で歌った時、深く豊かな包容力のあるホールの音響に、何故か大きな安心感を覚え、とても感動しました。その後、オペラ公演やオーケストラ定期演奏会などで、東京文化会館で大変に多くの演奏をさせていただくことになりましたが、このホールの深く豊かな音響を感じて歌を委ねることができた時に、作品に込められた至高の世界に導かれました。

その後、サントリーホールという、今や世界に名だたるホールが完成し、創立前の音響を確認するためのオーケストラ演奏（マーラー作曲交響曲）で歌いました。その時点で、既にサントリーホールの今後の活躍を予感させる素晴らしい音響が内在していることを感じ、このホールで歌うことが楽しみになり、その期待は歌う度にますます満たされていきました。

演奏家にとっての芸術創造体験への導きは、感受するホールの響きとの協調作業もあることを忘れてはならないと思っております。

母の育児日記によると「今日は幼稚園で保護者会があり、喜代美ちゃんの感受性は非常に強くて繊細なので育てるのが難しいかもしれない、と先生から言われた。」とあります。育てるのが難しい理由は、感受性が強いと嬉しさだけでなく辛さや苦しみも強く感じ取るからとのことだったようです。作曲家で教育家のオルフは「音楽は精神の腐葉土」と記述し、母と父が私の感受性を音楽の土壌にしっかり植えてくれたことで育つことができた、と思っております。

感受性があればこそ、譜面に込められた暗黙的な意味を感じ取ることができるので、ある意味で、感受性は師匠であると考えています。

オペラやコンサート、その一つひとつを演出家や指揮者の許でベストを求めていく作業、それは自分との闘いになり、武器というか拠り所になるのは幼少期からの勉強（全譜面をピアノで弾けるだけ弾くこと）に立ち返って譜面を読んで感じる事でした。オーケストラ定期演奏会は、切れば血が出るような壮絶な演奏の場であり、指揮者の許、オーケストラ奏者と共に一丸となつての演奏体験は、正に感受と感受との紡ぎ合いによって、確実に私を芸術創造体験に導いたと考えています。演奏の試練は、音楽に込められた尊い価値（真善美）が私の感受性を強くしなやかに鍛える場となっていたことを、振り返ると良く理解できます。芸術創造体験につ

いては、昨年3月、東京大学 芸術創造連携研究機構発足シンポジウム『学問と芸術の協働』で述べております。<https://youtu.be/BCC-Y2Wr-dg>

演奏活動に社会的な評価もいただき、身に余る声楽家の道を歩ませていただきました。それらを思う時、そこには必ず亡き母の存在が在ります。先の会報にも記させていただきましたが、母は私の日頃の行動にも演奏に関しても声をかけることは決してありませんでした。毎回のオペラやオーケストラ定期演奏会において自分との闘いにあけくれる私を徹底的に信じて、見守る母の祈りは、母が帰天した今も深く強く感ずることができ、支えられています。

そのまま声楽家としての生涯になる可能性は大きかったと思いますが、一人の素晴らしい女性との出会いによって、国立法人北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）博士前期・後期課程に修学し、演奏活動と科学研修を並行して行う中、入学から9年目に知識科学の博士号を取得し演奏家として科学の世界を見つめることになりました。<https://www.jaist.ac.jp/about/>

情報科学研究科および材料科学研究科で構成されていた北陸先端科学技術大学院大学に知識科学研究科が設置され、その一期生が入学したのは1998年、私がホスピスの患者さんと出会った年でした。私は二期生になります。

周りは大学を卒業したばかりの若者で、会社から送られた人材も20才代という中で勉強し続けてこられたのは、声楽家としての私を真正面から受け止めて下さり、芸術に対して何らかの可能性を確信している、当時の研究科長である野中郁二郎教授をはじめ、小長谷明彦教授、中森義輝教授、吉田武稔教授、國藤進教授、藤波努教授他の先生方のご指導に恵まれたからだと言えます。

上記、大学院大学のホームページに記載されているように、授業内容は、数三、物理、統計学、論理学、認知科学、他、それまでの私にとって触れることの無かった科目であり、当時の私はコンピュータを触ったことがありませんでした。毎授業では必ずレポート提出が課せられ、徹夜を何度も経験しました。午後のオフィスアワーを毎日利用して個人指導を受けないと良く理解することができませんでした。しかしグランドピアノのあるロールプレイルームは見晴らしの良い、海が見渡せる8階にあり、自然豊かな環境は快適で、いつでも声楽の練習および音楽鑑賞実験ができました。そのロールプレイルームでミニコンサートも頻繁に行いました。

最も印象に残っているのは、修士論文の音楽鑑賞実験にJ.S.バッハ作曲《マタイ受難曲》の受難コラールを用いた時のことです。「この曲を知らないで一生を終えることにならなくて良かった」という、感想文の中の言葉を読んだ時に、私はまたも音楽の力を具体的に感じました。

国際学会やシンポジウムへの論文発表・質疑応答も英語であり、博士後期課程の授業時の言語は英語です。国際シンポジウムでヨーロッパの参加者から「あなたは日本人なのに、何故西洋クラシック音楽の研究なのか？」との質問を受け、「私が生まれた時の音楽は、母や家族と歌う愛唱歌も、学校教育、流行歌も五線譜によるものであり、それらの音楽が私自身の音楽として在る。」と答えました。英語が堪能ならもっと有意義な議論ができたと思い、これまでの不勉強を悔やみました。

博士論文は『クラシック音楽歌唱における知識創造モデル—スキルサイエンスからの接近』で、内容は、真・善・美に向かって上昇していく歌唱演奏トレーニング方法のモデル化、音楽鑑賞実験、そのモデルを使用した演奏の実証研究、発声における『あくび』の効果の実験検証です。

国内外でも使われ自分も発声時に使っている『あくび』の作用の真実が知りたかったので、『あくび』の歌唱発声への効果について実験検証しました。耳鼻咽喉科医師として世界的名声を築いていた米山文明先生に「検証方法を教えてください。」とお願いしたところ東京大学造船科の機器を用いることを提示くださいました。

それは、完成した船の見えない部分の亀裂の有無を調べる機器でした。実験は、歌唱時の喉の作り方で『あくび』の工夫の有無の2種類を設定し、それぞれの骨伝導状態の違いを計測し数値で現すものです。実験結果は、ソプラノの高音と中音では『あくび』の工夫をした喉の作り方が大きく明らかに豊かな響きの値を示しているのが目で確認でき、低音では差がありませんでした。興味深かったのは、実験に立ち合った教授たちは「あくびの工夫の有無による音響を生で聴いた時は、それほど違いは感じなかったが、音響の計測値を見てその違いに驚いた。」と発言したことです。

この発言を聞いて直ぐに思ったのは、『そば鳴りの歌声』でした。これは、歌声を近くで聴くと大音量であっても、ホールで聴くと聴こえない響きの状態の歌唱発声のことです。歌声は響きが問題であることは知られています。この『あくび』の工夫の有無による声の響きの状態を見る骨伝導計測実験は、自らの歌声の響きの状態が計測によって数値とグラフで明確に示されます。私は、この実験検証によって、自らの発声方法の肯定を得ました。また発声指導にあたり、確信を持って臨むことができました。

47才で博士前期課程入学2年後に修士取得し、博士後期課程には6年間在学し博士号取得は7年目でした。博士論文の学外審査員2名はスキルサイエンスを社会的に初めて提示なさっ

た慶應義塾大学の古川康一教授、そして F.ディスクauhはじめ世界的声楽家の日本における主治医であり世界3大名医と評価されている耳鼻咽喉科医師の米山文明先生でした。

博士論文『クラシック音楽歌唱における知識創造モデル—スキルサイエンスからの接近』内容の、“真・善・美に向かってスキルが上昇していく歌唱演奏トレーニング方法のモデル化、そのモデルを使用した演奏の実証研究”、声楽発声における『あくび』の効果の実験検証、のプレゼンでの手応えに、合格の確信はありませんでしたが、自分の発声の真実を確認できたことだけでも満足でした。しかし合格をいただいた時には、思わず涙が出たのを覚えています。

北陸先端科学技術大学院大学在学中、芸術に可能性を見ている研究者である先生方の熱心なご指導によって、科学の世界の一端を体験することができ、与えられる一つひとつの研究の結果を自分の演奏に活かしながら、演奏と研究に並行して努めることができ、それは今も継続しております。深く、深く感謝しております [https://researchmap.jp/gratiamusic1\\_11\\_4](https://researchmap.jp/gratiamusic1_11_4)

このような世界に私を導いた、一人の素晴らしい女性とは、福岡のホスピス患者さんです。

1998年九州交響楽団定期演奏会マーラー作曲交響曲第4番のソプラノソロを演奏させていただいた時、ホスピスにお願いして、ご奉仕のコンサートをさせていただき、出会いました。

私が留学以来通いつけているドイツでは、プロの演奏家のご奉仕の演奏をするのはごく当たり前で、ラインドイツオペラ・デュッセルドルフ歌劇場専属歌手の矢野恵子さん（メゾソプラノ）は帰国の度に、お父様が入院なさっている、上記、福岡のホスピスで歌の演奏をなさっておられました。それを伺っていたので、私もお奉仕の演奏をお願いしました。

ピアノは熊本在住で音楽短大教授の私の桐朋学園女子高（普通科）時代からの親友・高野雅子さんが引き受けてくれました。陽の光が燦々と入る木造の気持ちの良いホスピス2階の踊り場に、ベッドごとや車いすで患者さんがお集まりになり、集まらない方は各病室にビデオで私の映像と歌が届けられました。私は白地に草花が散りばめられたドレス・ワンピースを着て、日本の唱歌、アベ・マリアなどを歌いました。皆さまとても喜んでくださり、歌った後も病室に戻らず、私はお一人おひとりとお話をすることができました。

その中に、「私はこの歌のこの歌詞で生きています。死ぬのが怖くないんです」と車いすながら背筋がピンと伸び、その楽譜の歌詞を指さして、しっかりとした眼差しで私を見つめて仰る女性がいらっしゃいました。その時、私は、魂がドクッと動いたように感じて、この女性ご本人もご家族も何とお幸せなことか・・・と思いました。このように感じさせた歌の力を目の当たりにして、「歌の作用を知りたい」と強く思いました。

これまでも北オランダ交響楽団3回の定期演奏会でモーツァルトのモテットを演奏した際、演奏会3回全てスタンディングオーベーションを頂くという、国籍などの差異を問題にしない歌唱芸術体験に恵まれてきましたが、このホスピス患者さんの「この歌のこの歌詞で生きている」という言葉と事実は、私の心に深く突き刺さり、この時に感じた力のようなものが新しい世界の扉を開けてくれました。

この体験が私を演奏活動と並行して科学に目を向けるようになったきっかけです。ご奉仕の演奏会の翌年1999年北陸先端科学技術大学院大学に入学しました。47才の時です。2年間で博士前期課程を修了して修士号を取得した後、そのまま博士後期課程に進学し2007年に修了し、2008年に博士号を取得しました。

この文章を読んでくださっている方の中で、演奏への糧という観点で科学の大学院に興味をもたれて、人生の中で数年間、身を置いてみたいと思う方は、ご相談いただけましたら、具体的にご案内いたします。（※問い合わせは日本歌唱芸術協会 [jsaa.okinawa@gmail.com](mailto:jsaa.okinawa@gmail.com) まで）

演奏体験を研究テーマにしたことで、声楽の楽器は身体であることが科学的視点で理解可能であること、声楽トレーニングは身体全体の機能を活性化し感受性を鍛え、個としての自覚、気づきを多くする可能性があり、創造性の開発に繋がることを、私なりに確信しました。

現在は芸術創造体験による人の感受性育成支援に関心を持っております。2018年9月より、東京大学の1, 2年生を対象にした授業『楽器としての身体：声楽の実践と科学』を身体運動科学者の工藤和俊先生と担当しており、毎年度の授業で、全履修生に、あるがままの自分に対しての『自信』という効果が確認できることを、工藤先生と共に大変に喜んでおります。

日本は先進国の中でも自殺者が非常に多いことは知られており、私もウィーンのボイスコーチに「新聞で見た。日本の自殺者は年間の交通事故死者より多いのは何故だ？単一民族で経済大国で、何が問題なのだ？」と聞かれました。

この質問は通奏低音のように私の中で鳴っております。

一人ひとり、かけがいのない、その人だけの感性があり、能力があり、そのことに自らが気づく感受性を鍛えることで、迷い悩みながらも何とか自分を頼りに生き抜いていくことができるのではないかと考えており、それを願いつつ、声楽と科学と共に活動してまいります。

※日本歌唱芸術協会 2022年3月号抜き刷り

体表振動測定実験 2007 年全 9 か所に順次装着して計測体表振動測定実験センサー装着例

被験者は著者 顔面 5 か所,左右顎関節部,第 7 頸椎,胸骨部

